慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	居初つなの往来物
Sub Title	The "Oraimono" by Isome Tuna
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.170- 176
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

居初つなの往来物

石川　透

一、はじめに

江戸時代前期から中期にかけて、女流の往来物作者として活躍した居初つなが、奈良絵本・絵巻を制作していたことは、「奈良絵本・絵巻の制作者、居初つな」（『奈良絵本・絵巻研究』第六号、二〇〇八年九月）等に記した。男性が、文字と絵を分業によって、制作していたと考えられていた奈良絵本・絵巻を、女性が、しかも、文字と絵の両方を制作していたと判明したことは、画期的である。これは、文学、絵画、国語学、文化史といった、あらゆるジャンルにまたがる問題として、たいへん、おもしろく、重要な事例となるであろう。

おそらくは、居初つなという人物についての研究も、往来物以外からの研究が進むことになるであろう。また、現状では、居初つなの制作した作品群の全てが明らかになっているわけではない。その作品群の発掘も、今後とも行う必要がある。

二、居初つなの往来物

居初つなの往来物については、既に小泉吉永氏による『往来物大系』『稀覯往来物集成』『江戸時代女性文庫』等の解説によって、明らかにされている。それらによると、現存する居初つなの往来物として、以下のような作品があげられている。

貞享五年（一六八八）『女百人一首』
貞享五年（一六八八）『女文章鑑』
元禄三年（一六九〇）『女書翰初学抄』
元禄七年（一六九四）『女教訓文章』
元禄八年（一六九五）『女実語教・女童子教』
享保一一年（一七二六）『琵琶の海』

これらには、いわゆる改題本も多く存在しているし、刊行年が離れる『琵琶の海』には、その元になる版が存在する可能性もあるが、この六点が居初つなの代表作といってよいのであろう。いずれについても、委細は小泉吉永氏による解説とインターネット上のホームページ「往来物倶楽部」等を、御参照願いたい。

居初つなは、「居初」という苗字からして、大津市堅田に本拠を有する一族であると思われる。居初氏は、堅田の豪

族三家の一つで、平家の全盛時代から中世にかけては、琵琶湖を支配していたという名族である。江戸時代には、多くの文人を排出したらしく、現在も、堅田には「天然図画亭」と呼ばれる居初氏の庭園があり、御子孫が居住なさっている。

おそらくは、居初つなもここで育ち、ある段階から京都へ住むようになったと思われる。そして、いつとは断言できないが、少なくとも貞享年間ぐらいからは、往来物の執筆、奈良絵本・絵巻の制作、さらには、版本の筆工の仕事をしていたようである。

もちろん、奈良絵本・絵巻の制作の量からみて、たんなる趣味の範囲ではない。おそらくは、これらの仕事により、収入を得ていたであろう。いわば、相当な文化的仕事をこなす、キャリアウーマンだったのである。

三、窪田つなの往来物

この居初つなと同時代に、「つな」という同じ名前を有する女性が存在する。それは、窪田つなとされている女性で、やはり、往来物を作っているという。さらにおもしろいことには、小泉吉永氏の解説によれば、母親の窪田やすも往来物作家で、しかも、万治年間頃から活躍していることから、女流往来物の皓歯をなす存在であるという。

万治三年（一六六〇）に刊行された、窪田やすの『女初学文章』の奥書には、以下のように記されている。

此女初学文章、都にはよろしき女筆あまたおはしますへけれは、其憚おほかれと、いなみかたき仰により、うつしまいらせ侍るのみ　江州大津住窪田宗保息女やす。

一方、貞享四年（一六八七）に刊行された、窪田つなの『女今川』の奥書には、以下のように記されている。

此女今川、都にはよろしき女筆あまたおはしますへけれは、其憚おほかれと、いなみがたき仰により、写し参らせ侍るのみ　江州大津住窪田宗保孫つな筆

このように、両者の奥書は酷似しており、二人が親娘であることは、動かないであろう。しかし、窪田つなの奥書では、「江州大津住窪田宗保孫つな」としていることから、苗字が窪田であったと限られるわけではない。祖父が窪田姓でもその孫が同姓であるとは限らないからである。

しかも、ここに、「江州大津住」と記していることから、これはひょっとすると、居初つなのことではないかと疑いたくなるのである。

四、筆跡の比較

そこで、仮に窪田つなと居初つなという二人の名前を使い、両者の筆跡を比較してみよう。窪田つなの著作としては、『女今川』があるのみであるから、それを使い、居初つなの著作としては、代表作ともいえる元禄八年刊の『女実語教・童子教』を使用してみる。なお、『女今川』は、手元にある後版を使用したが、この後版は、初版と思われる貞享四年版と同筆跡を有している。

その実例は、本論考の最後に、最初に『女今川』二枚、後に『女実語教・童子教』を二枚掲出した。これにより、一

目瞭然であるが、両者は同筆であることがわかる。平仮名の「の」「を」等、漢字の「人」「女」等、さらには、文字の続け方にいたるまで、酷似している。若干「ひ」の膨らみ方に差があるが、おそらくそれは、七年の歳月の差とみるべきであろう。この類似の度合いは、たまたま似てしまったでは、済まない程度なのである。

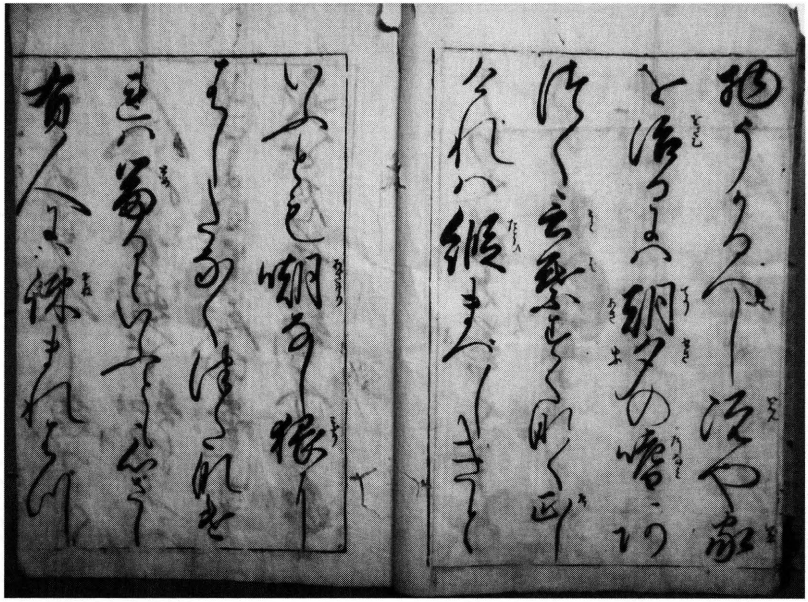
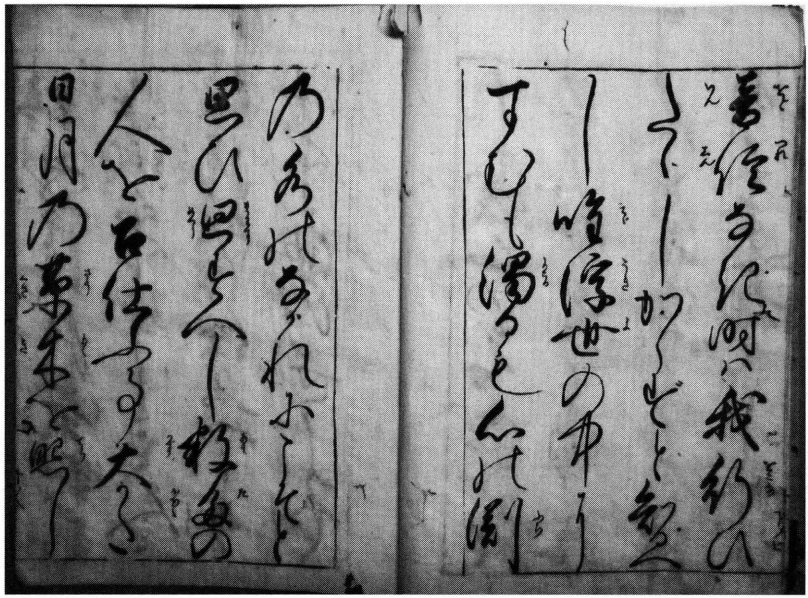
もちろん、同時代に大津に住んでいるという状況証拠もあるから、同一人物であることは間違いない。

五、おわりに

以上のように、窪田つなとされていた人物は、居初つなと同一人物であることがわかる。とすると、居初つなの生い立ちがさらに理解できる。

居初つなの母親は、窪田やすという大津に住む女流の往来物作家であったこと、おそらくは、その娘つなは、幼少からその薫陶を受け、文化的に優れた環境で育ったであろうことは、容易に想像できる。

居初の姓が父親の苗字であるのか、または結婚相手の姓であったのか、はっきりはしないが、奈良絵本・絵巻には、「居初氏女」と書いていることからすると、父親の姓が「居初」であった可能性が高いであろう。

また、『女今川』において、母親と思われる窪田やすの書いた奥書を踏襲したのは、どのような意味があるのか、等々、興味が尽きない。

また、これらのことが、奈良絵本・絵巻や版本の制作にどう関係するのか、今後のさらなる研究が待たれる人物なのである。